

# 舞鶴市における子育ての実態と ニーズに関する調査研究<sup>1)</sup> —保護者のニーズと子育て支援の関連について—

前田明日香\* 荒井 庸子\*  
張 鋭\* 井上 洋平\*  
荒木 穂積\*\* 竹内 謙彰\*\*

本稿では、舞鶴市における保護者の子育ての実態とニーズを明らかにするとともに、保育所・幼稚園と健診・発達相談が子どもの発達上のような側面に着目して子育て支援を行っているのか、その共通性と差異性をさぐる中で、各機関に求められる子育て支援のあり方について考察する。分析の結果、子どもへの心配事に関して保護者では生活習慣や情緒的側面に關わる内容が多く、健診・発達相談では「言葉」や発達全般に關わる問題、保育所・幼稚園では集団生活や対人場面における問題が多く示されており、子どもの発達状態をみる場面によって心配内容が異なることが明らかになった。心配な行動を示す子どもへの対応では、対応されていないケースが最も多く、次に各機関で対応するに留まるケースが大半を占めていた。保護者の子育てニーズでは、抱えている心配内容や各機関で受けた助言・指導内容によって専門家に支援を求めるものから、保育所・幼稚園といった身近な場所に支援を求めるものまで多岐に渡っており、各機関が連携・協働し、保護者や子どもが抱えている問題を共有することによって各々の専門性を生かした多面的な子育て支援を提供することが期待される結果となった。

キーワード：子育てニーズ、子育て支援、子育て感、保護者、乳幼児健診、就学前

## はじめに

厚生労働省は、近年の子育てに關わる問題への対応策として新たな施策を次々と打ち出し、子育て支援への取り組みの方向性を示している。

2000年には、少子化問題や育児不安の増加に対して「健やか親子21」を策定し、“子どものこ

ころ安らかな発達の促進と育児不安の軽減”を課題の一つとしてあげている。また、2003年には「次世代育成支援対策推進法」が公布され、国、地方公共団体（市町村および都道府県）、事業主が一体となって子育て支援に取りくむ基盤を作り上げるために必要な措置が講じられた。同年、「少子化社会対策基本法」も施行され、“家庭や子育てに夢を持ち、かつ、次代の社会を担う子どもを安心して生み育てることができ環境を整備し、子どもがひとしく心身ともに健やかに育ち、子どもを生み育てる者が真に誇

\* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

\*\* 立命館大学産業社会学部教授

りと喜びを感じることでできる社会を実現”していくことを国家的な課題としてあげている。このように、保護者の子育てを社会で支援するという理念に基づいて、現在、子育て支援の体制づくりが進められている。

子育てを支援していくための基本的視点として、保護者の子育て上のニーズに対応することが第一にあげられる。子育て上のニーズには大きく分けて①子どもの成長・発達に関わるものと②保護者（主に母親）自身に関わるものの2つがあげられる。また、保護者の子育て上のニーズに留まらず、子どもの発達における障害やつまずきに対する早期の発見や早期の支援も子育て支援に位置づくと考えられる。前述した「健やか親子21」においても、その具体的な取り組みとして、子育て支援の観点から乳幼児健診等地域保健における早期発見・早期療育、保健指導の見直しの必要性があげられている。

また、2005年に施行された「発達障害者支援法」では、発達障害の早期発見、早期の発達支援、その他の支援が行われるよう、国及び地方公共団体にその措置を講じている。また、同法により乳幼児健診・発達相談において発達障害の早期発見に十分留意しなければならないこととするとともに、都道府県および市町村は、児童相談所等関係機関と連携を図りつつ、発達障害者の家族に対し、相談や助言等の支援を適切に行うよう努めなければならないとしている。

子育て支援機能を担う重要な場としては主に、全国の自治体が発達している乳幼児健診等の発達相談に加えて、保護者や子どもが日常的に関わる保育所・幼稚園の場がある。保育所・幼稚園の子育て支援の基本的視点が1994年に策定されたエンゼルプランの「子どもの利益が最大限保障されるよう配慮された子育て支援施

策」から、1999年の新エンゼルプランの「成人の福祉・自己実現を保障する社会資源」へと転換していることから、保育所・幼稚園において、子どもの保育に留まらず保護者に対する子育て支援への取り組みが求められていることが分かる（柏女、2003；鑑・千葉、2005）。

子どもと保護者をともに支援していく保育所・幼稚園や乳幼児健診・発達相談の役割が今後さらに重要となり、共通の課題に取り組むために各機関の協働・連携を図る必要性がある一方で、多様化する子育て問題に対応するためには、それまで形成されてきた方針や価値観を踏まえた各機関独自の専門性を生かした多面的な子育て支援の方法を確立していく必要性も生じている。

保護者の多様な子育てニーズに対応した支援に加えて、子どもの発達における障害やつまずきへの早期発見・早期支援をも包含した子育て支援を各機関において確立していくためには、保育所・幼稚園や乳幼児健診・発達相談が子どもの発達上のどこに着目して助言・指導をおこなっているのか、いわゆる各機関における「子育て感」の実態を把握する必要があると考えられる。その上で、保護者の子育てニーズを踏まえ、各専門機関に求められる具体的な子育て支援策について検討していく必要がある。

前述した「発達障害者支援法」に基づき、2007年に国のモデル事業の指定を受けた京都府舞鶴市<sup>2)</sup>では、「発達障害児支援調査事業」として発達障害をはじめとする支援が必要な児童の具体的な支援策を検討するとともに、様々な取り組みを進めている<sup>3)</sup>。その一環として、筆者らは舞鶴市における発達支援の実態調査を実施した。この実態調査では、発達障害等に対する保育所・幼稚園における取り組みの実態や課

題を明らかにするとともに子どもの発達状況に関わる保護者への子育て支援の実態およびニーズを明らかにすることを目的とし、舞鶴市内の保育所、幼稚園、および保護者へ質問紙を配布、回収し、分析を行った<sup>4)</sup>。

本稿では、舞鶴市の保護者に対する実態調査の結果の一部を「子育て感」に着目して分析を進め、考察を行う。まず、保護者が抱えている子育て上のニーズの中で子どもの成長・発達に関わる心配事や子育てニーズを明らかにする。さらに、保育所・幼稚園や健診・発達相談では、子どもの発達上のような側面に着目して助言・指導しているのかを明らかにするとともに、保護者、保育所・幼稚園、健診・発達相談の3者間における「子育て感」の共通性と差異性をさぐることを目的とする。加えて、保護者が保育所・幼稚園や健診・発達相談において何を期待しているのかを明らかにしていくとともに、子育て支援の観点から保育所・幼稚園と健診・発達相談に求められる子育て支援のあり方について考察する。

## 1. 研究方法

舞鶴市内の保育所・幼稚園に通園する乳幼児の保護者を対象に、各園から手持ちで、子どもの年齢に応じ、アンケート用紙を舞鶴市宛返信用封筒とともに配布した。調査期間は2007年11月から12月末までである。回収した質問紙のうち、全て未記入であったものを除いた1,623件（回収率54.7%）を本研究の分析の対象とした。

保護者用のアンケートは、①記入者と子どもの属性、②健診・発達相談における助言・指導内容、支援、保護者のニーズ、③保育所・幼稚園における助言・指導内容、支援、保護者のニ

ーズ、④保護者自身の子育てに関わる心配内容、子育て感、子育てニーズ、⑤子どもの発達状況についての5つの項目により構成されている<sup>5)</sup>。

## 2. 結果・考察

### (1) 記入者と子どもの属性

#### ① アンケート回答者

アンケートの回答者は母親が1540名で全体の95%の割合を占めていた。母親以外は、父親が63名（4%）、その他が16名（1%）、未記入が4名であった。

#### ② 母親の年齢

母親の年齢は30代前半が1593名中（30名が未記入）619名と最も多く、次いで30代後半が多い結果となった（図1参照）。

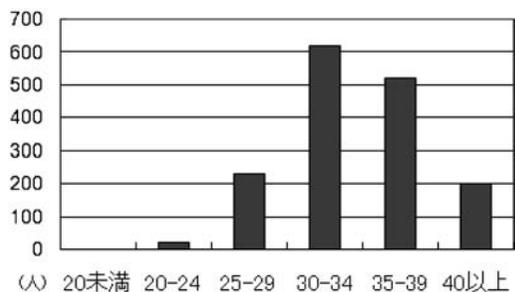


図1 母親の年齢

#### ③ 子どもの属性

子どもの年齢は5歳が最も多く、全体の27.6%であった。次いで4歳が26.5%、6歳と3歳がともに14.8%、2歳が8.8%、1歳が6.2%、最も少なかったのが0歳で1.3%であった。性別は全体で男児が849名、女児が769名であった（表1参照）。

表1 対象児の年齢

	人数(女児)	%
0歳	21(7)	1.3
1歳	100(42)	6.2
2歳	143(64)	8.8
3歳	240(109)	14.8
4歳	428(205)	26.5
5歳	446(224)	27.6
6歳	240(118)	14.8
未記入	5	
合計	1623(769)	100.0

## (2)保護者の心配事や子育てニーズ

### ①子育て感

子育てに関わって、現在の保護者自身の気持ちに最も近いものを尋ねた質問に対して、「子どもに対してイライラすることが多い」(47.7%)、「自分の時間がもてない」(44.7%)、「必要以上に叱ってしまう」(43.9%)、「育児について心配なことがいろいろある」(43.8%)、「ゆっくりと子どもと接する時間がない」(38.3%)と回答した保護者が多く、その割合は

全体の4～5割であった(図2参照)。

### ②心配事の有無と心配内容

子どもの様子で心配なことを尋ねた質問では、まず、半数の保護者が「心配あり」と回答した。心配している内容は、「かんしゃくを起こしやすい」、「すぐに手が出る」等の気持ちのコントロールの難しさや、「落ち着きがない」、「飽きっぽい」等の注意・集中の難しさを含む行動上の問題が上位を占めていた。これら行動上の問題に加えて、「おねしょがある」、「偏食がひどい」、「不安が強い」等の項目も保護者の心配内容の上位にあがっていた(図3参照)。

「心配あり」と回答した保護者の子どもの年齢に違いがあるのかを調べた結果、0歳児を除き、その他の年齢では4歳児を頂点にして緩やかな山形を描いていたが、どの年齢においてもほぼ一定の割合で子どもの様子で心配なことがあることが分かった(図4参照)。

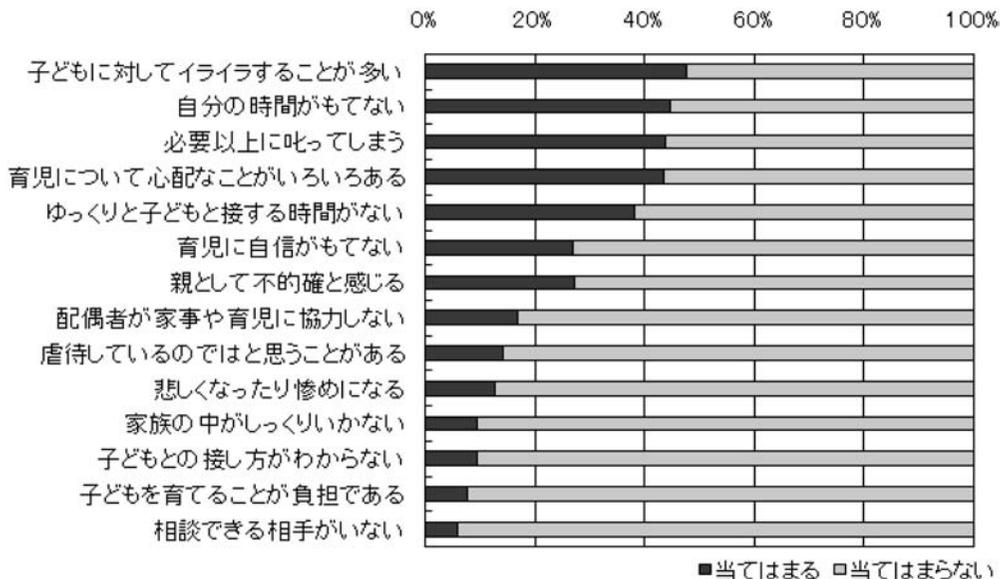


図2 保護者の子育て感 (複数回答)

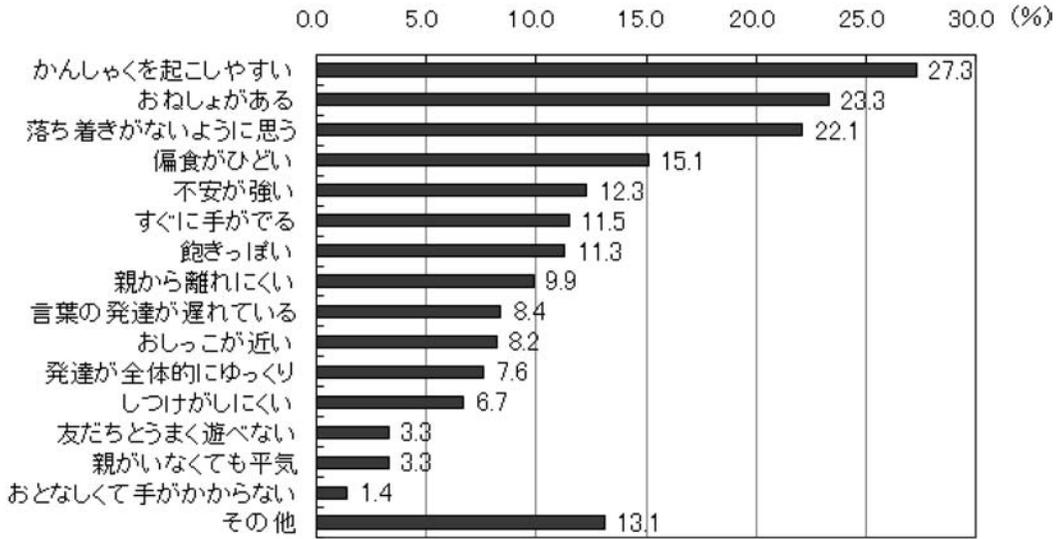


図3 保護者が心配している内容（複数回答）

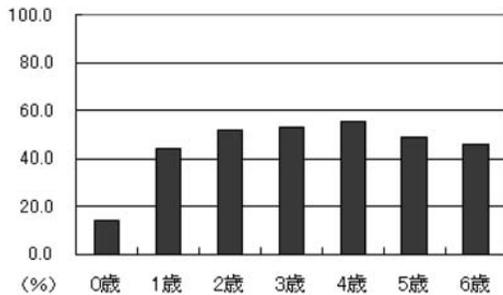


図4 「心配あり」と回答した保護者の子どもの年齢

### ③心配内容と年齢的差異

保護者が心配している内容の上位7項目について、子どもの年齢に違いがあるのかを調べた。その結果、「落ち着きがない」は、どの年齢においても一定の割合で心配内容としてあげられていた（図5）。「すぐに手が出る」、「かんしゃくを起こしやすい」は、年齢が上がるにつれて、減少傾向にあった（図6、図7）。ただし、「かんしゃくを起こしやすい」では、減少傾向をたどりながらも3歳と5歳時点でいったん増加するという特徴がみられた。「おねしょがある」「不安が強い」は、3歳から5歳で高くな

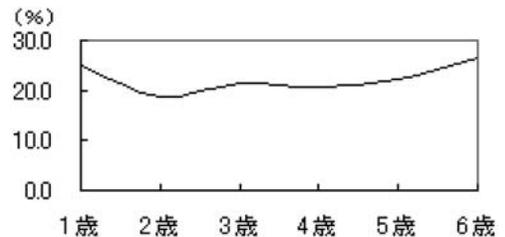


図5 心配内容「落ち着きがない」

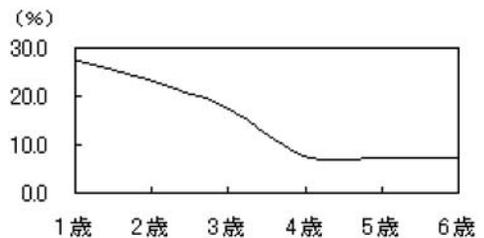


図6 心配内容「すぐに手が出る」

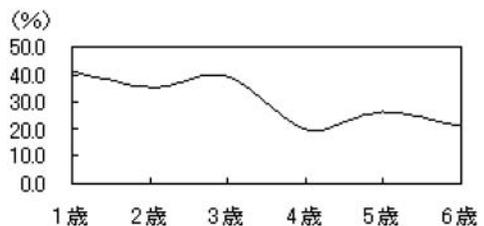


図7 心配内容「かんしゃくを起こしやすい」

り、6歳になると減少する傾向にあった(図8, 図9)。「偏食がひどい」,「飽きっぽい」は、年齢が上がるにつれて増加傾向にあった。ただし、これら二つの心配内容は3歳を過ぎるといったん減少し、再び増加するという特徴がみられた(図10, 図11)。上記7項目に共通して、3

歳児で保護者の心配事が多くなるという特徴がみられた。

④心配事の相談相手

保護者自身の心配事を誰かに相談したか尋ねた質問では、「相談した」と回答した人は70%であった。その相談相手は「配偶者・パートナー」(73.9%)が最も高く、次に「その他の家族」(49.9%),「友だち・近所の人」(38.4%)という順番であった。専門家への相談では「園長・先生」が最も多く34.5%であった。保健師(13.7%)や医師(10.7%)等、その他の専門家への相談の割合は低く、保護者自身が心配事を気軽に相談できるような専門的な相談機関が十分に活用されていないことが分かる(図12参照)。

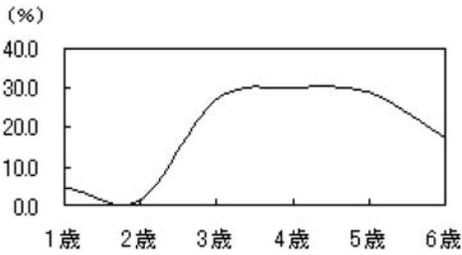


図8 心配内容「おねしょがある」

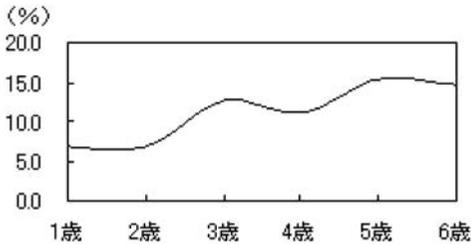


図9 心配内容「不安が強い」

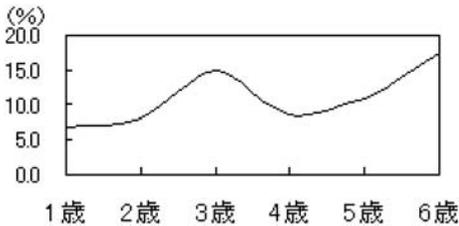


図10 心配内容「偏食がひどい」

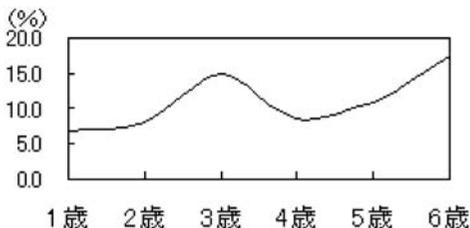


図11 心配内容「飽きっぽい」

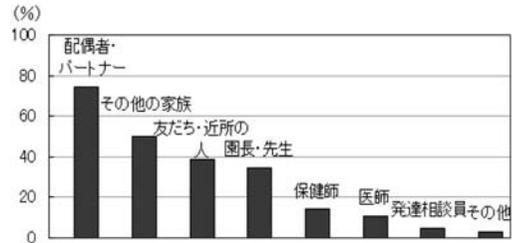


図12 保護者の相談相手

⑤小考察

保護者の子育て感から、保護者が自分に費やす時間と子育てに費やす時間の両立の中で悩みをもち、そのために子育てにおいても焦りやイライラを感じていることが示唆された。子育てに対する否定的感情は、子どもとの関わりと同時に保護者自身の生活における充実感とも結びついていることがうかがわれる。

次に、子どもの様子で心配なことがある保護者が全体の過半数存在していることが明らかに

なった。心配内容では、気持ちのコントロールや注意・集中の難しさ等の行動上の問題とともに偏食等の生活上の困難や不安の強さという子どもの気質・情緒的側面に関わるもの等、実際に生活を共にすることで把握可能な心配事が上位にあげられていた。しかし、心配内容の年齢的な変化をみると、子どもの発達に伴い心配事が減少するもの、増加するもの、変化のないもの等多岐に渡っていた。この事実は、今後、保護者の支援を考える際の重要な手がかりになると考えられる。また、共通して3歳児で保護者の心配事が多くなるという特徴がみられた。3歳児は発達のにも自我が拡大する時期であり、一般的に「第一反抗期」と呼ばれる時期でもある。これらの結果は3歳児の発達の特徴を顕著に表わすものであると同時に、3歳児という年齢が子どもや保護者に対して、より配慮を必要とする時期であることが分かった。

最後に、保護者自身の子育てに関わる心配事は、専門家に相談しにくい実態があることが明らかになった。子どもに関する心配事は年齢が高くなっても減少しないことから、3歳児健診以降にも保護者自身が心配事を気軽に相談できる機会を専門家側から提供する必要があると思われる。また、保護者側からも働きかけやすいように相談機関等の充実や周知、育児情報の提供が求められる。一方で、専門家への相談の中では園長や先生へ相談する保護者が比較的多くみられたことから、保育所・幼稚園が重要な支援機能を果たすことが期待される。

### (3)健診・発達相談における助言・指導

#### ①助言・指導の有無と内容

健診・発達相談において何らかの助言・指導を受けたとことあるか尋ねた質問に対して、

244人（全体の15%）の保護者が「ある」と回答した。どのような内容で助言・指導を受けたのか複数回答で選んでもらった結果、「ことばが遅い」が64.3%と最も多かった。次いで、「発達がゆっくり」が38.5%、「落ち着きがない」が17.2%であった。「自閉傾向がある」、「視線が合いにくい」では6.1%、「やりとりが苦手・友だちと遊べない」は2.0%と極めて低い結果となった（図13参照）。

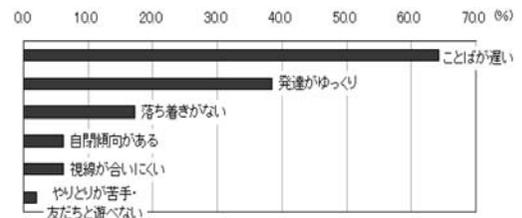


図13 健診・発達相談における助言・指導の内容

#### ②助言・指導の内容と年齢的差異

助言・指導を受けた年齢は、1歳台が43%と最も多かった。次いで、2歳台が21%、3歳台が19%、1歳未満が15%、4、5歳台が2%であった。子どもが3歳になるまでに8割の保護者が助言・指導を受けていることが分かる。

助言・指導の内容と受けた年齢を調べた結果、「言葉が遅い」では、単語が聞かれ、増加し始める1、2歳台が最も多く、その後減少傾向にあった（図14）。「発達がゆっくり」は1歳未満で最も多く、その後減少し、4、5歳台で再

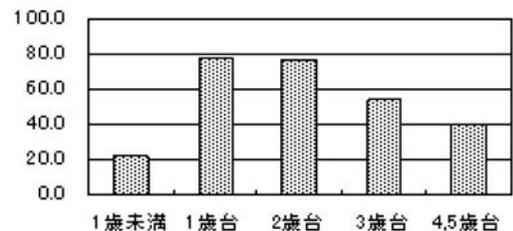


図14 助言・指導内容「ことばが遅い」

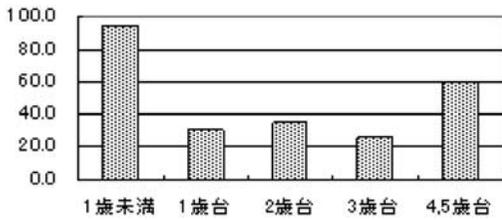


図15 助言・指導内容「発達がゆっくり」

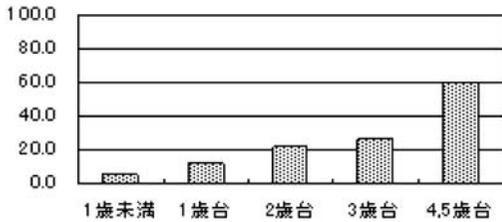


図16 助言・指導内容「落ち着きがない」

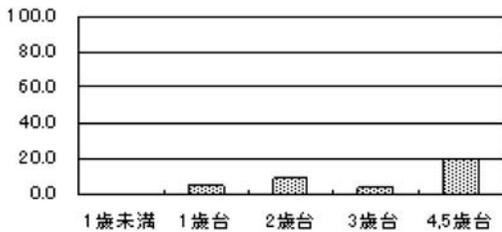


図17 助言・指導内容「自閉傾向がある」

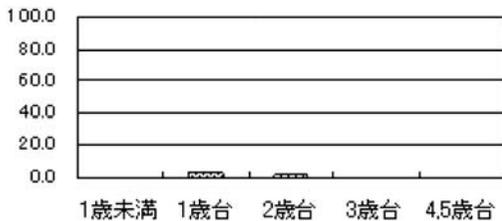


図18 助言・指導内容「やりとりが苦手・友だちと遊べない」

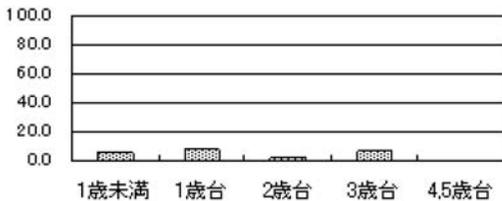


図19 助言・指導内容「視線が合いにくい」

び増加する傾向にあった(図15)。「落ち着きがない」は年齢が上がるにつれて増加し、4、5歳台で6割にのぼった(図16)。「自閉傾向がある」では1歳台から極少数ではあるが助言・指導を受けており、4、5歳台で最も多かった(図17)。「やりとりが苦手・友だちと遊べない」は1、2歳台で若干みられた(図18)。「視線が合いにくい」は1歳未満から助言・指導を受けており、3歳台までほぼ同程度の割合でみられた(図19)。

③助言・指導後の支援

健診・発達相談において助言・指導を受けてから現在通っている機関を尋ねた質問に対して、「どこにも行っていない」と回答した保護者が最も多く、全体の6割(59.3%)を占めた。次いで、療育機関が28.5%、病院が13.2%であった。保健センターや保健所に通っている保護者は極めて少なく、1割に満たない結果となった(図20参照)。

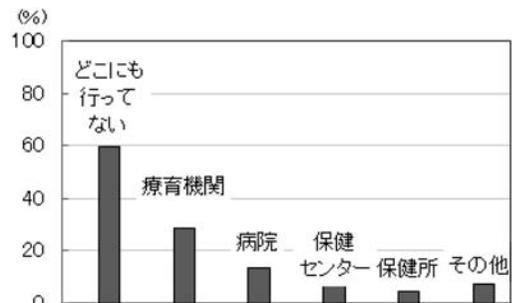


図20 助言・指導を受けて現在通っている機関

④助言・指導内容とその後の支援

助言・指導を受けた後、現在、支援を受けていないケース(「支援なし」と、療育機関等に現在も通う等何かしらの支援を受けているケース(「支援あり」)が、健診や発達相談でどのよ

うな内容の助言・指導を受けたのか調べた結果、「言葉が遅い」では「支援なし」が「支援あり」に比べ25%程高い割合でみられた。「発達が遅い」では「支援あり」が「支援なし」を若干上回っていた。一方で、「自閉傾向がある」、「視線が合いにくい」、「やり取りが苦手・友だちと遊べない」という内容の助言・指導を受けたケースは必ず何かしらの支援を受けていることが明らかになった（図21参照）。

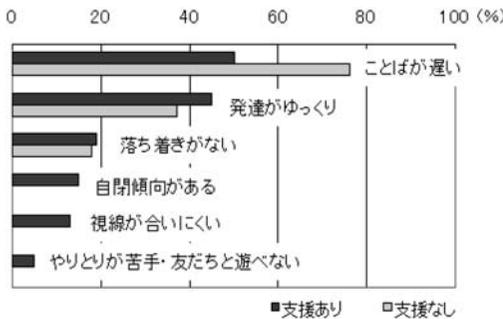


図21 助言・指導を受けて現在通っている機関

⑤助言・指導を受けた保護者の子育てニーズ

健診・発達相談において助言・指導を受けた人と受けていない保護者の間で、子育てにおけるニーズに違いがあるのかを調べた。その結果、助言・指導を受けた保護者は受けていない保護者に比べて有意に高い割合で子育てにお

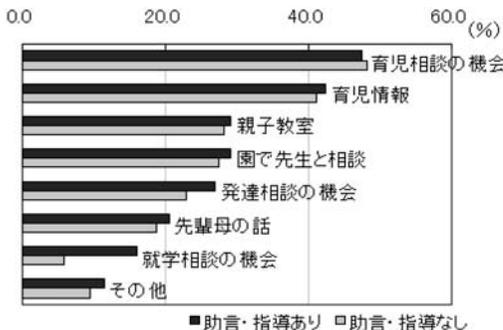


図22 助言・指導の有無と子育てニーズ

るニーズをもっていることが分かった ( $\chi^2(1) = 23.614, p < .01$ )。特に、助言・指導を受けた保護者は受けていない保護者に比べて、高い割合で「就学相談の機会」や「発達相談の機会」を求めている（図22参照）。

⑥助言・指導を受けた保護者の子育て感

健診・発達相談において助言・指導を受けた人と受けていない保護者の間で、子育て感に違いがあるのかを調べた。その結果、助言・指導を受けた保護者は受けていない保護者に比べて、ほとんどの項目において有意に高い割合で子育てに対して否定的な感情を抱いていることが分かった（「育児について心配なことがある」 $\chi^2(1) = 23.591, p < .01$ 、「子どもに対していらいらすることが多い」 $\chi^2(1) = 15.213, p < .01$ 、「必要以上に叱ってしまう」 $\chi^2(1) = 8.997, p < .01$ 、「自分の時間が持てない」 $\chi^2(1) = 1.688, ns$ 、「ゆっくりと子どもと接する時間がない」 $\chi^2(1) = 0.492, ns$ 、「育児に自信が持てない」 $\chi^2(1) = 22.521, p < .01$ 、「親として不適格と感じる」 $\chi^2(1) = 18.016, p < .01$ 、「配偶者が家事や育児に協力しない」 $\chi^2(1) = 10.965, p < .01$ 、「虐待しているのではと思うことがある」 $\chi^2(1) = 12.033, p < .01$ 、「悲しくなったり惨めになる」 $\chi^2(1) = 8.910, p < .01$ 、「子どもとの接し方が分からない」 $\chi^2(1) = 14.704, p < .01$ 、「家族の仲がしっくりいかない」 $\chi^2(1) = 9.683, p < .01$ 、「子どもを育てることが負担である」 $\chi^2(1) = 5.522, p < .05$ 、「相談できる相手がいない」 $\chi^2(1) = 8.896, p < .01$ )（図23参照）。

⑦小考察

健診・発達相談において何らかの助言・指導を受けたことのある保護者は全体の4分の1で

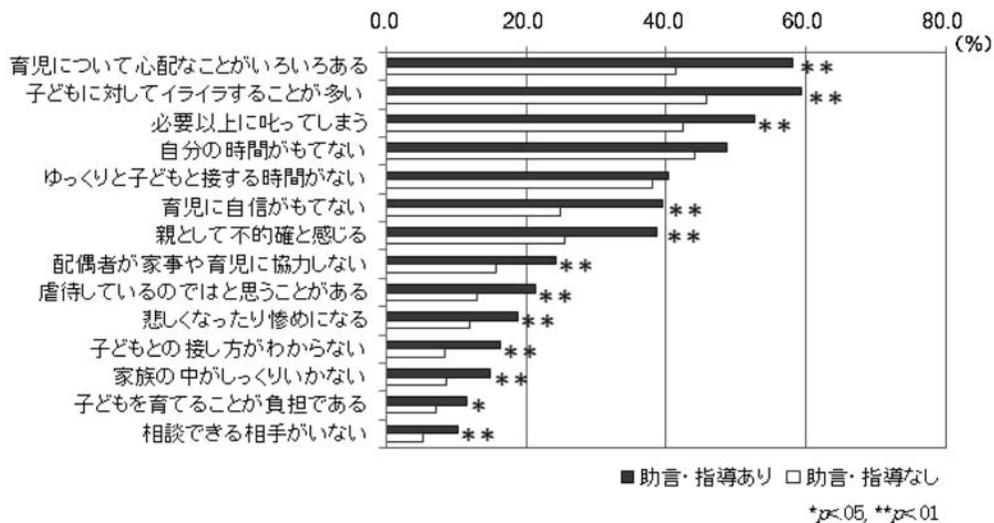


図23 助言・指導の有無と子育て感

あった。その内、8割が3歳になるまでの間に助言・指導を受けており、発達に関わる障害やつまずきの早期発見において、日本の乳幼児健診システムが有効に活用されていることがうかがえる。

健診・発達相談では、保護者の心配内容にみられたような詳細な発達の側面について触れるというよりは、それらを包括した発達全般への助言・指導や、専門家だけではなく保護者にも分かりやすい「ことばの発達」という指標による助言・指導がなされやすいことが分かった。しかし、これら「ことばが遅い」、「発達がゆっくり」という項目は保護者の心配内容では10%に満たない結果となっている。

「落ち着きがない」という助言・指導は、保護者の心配内容でも上位にあがっており、保護者同様に健診・発達相談においても問題として把握されやすいことが分かった。ただし、保護者の心配内容では年齢に関わらず一貫して「落ち着きがない」行動は心配内容としてあがっていたのに対して、健診・発達相談の場面では、

年齢が上がるにつれて「落ち着きのなさ」を問題行動として取り上げていた。

一方で、「自閉傾向がある」、「視線が合いにくい」、「やりとりが苦手・友だちと遊べない」という内容で助言・指導を受けたケースは、それぞれ、助言・指導を受けたケース全体の5%程しかみられず、これらの項目が健診・発達相談において保護者へ伝えにくい可能性があるとともに、専門家がこれら発達障害の早期徴候を把握することが困難な現状があることが示唆された。「発達障害者支援法」に基づき、健診等を通して発達障害の早期発見・早期支援に結びつけるためにも、専門家による認識、知識、技術力の向上が求められる。

健診や発達相談において助言・指導を受けた後、現在、支援を受けていないケースが6割程みられた。助言・指導を受けた保護者は受けていない保護者に比べて「子育て感」において、より高い割合で否定的な感情を抱えており、「発達相談」や「就学相談」等の高い子育てニーズをもっていることから、その後の支援体制

の見直し、充実を図る必要があると思われる。

#### (4) 保育所・幼稚園における助言・指導

##### ① 助言・指導の有無と内容

保育所や幼稚園において助言・指導を受けたことがあるか尋ねた質問に対して、237人（15%）の保護者が「ある」と回答した。

0歳～2歳児で最も多かった助言・指導内容は「噛みつきがある」で41.7%であった（図24参照）。「その他」の自由記述による回答も多く、その内容は「読み聞かせの時にじっとしない」、「小食」、「落ち着きがない」、「かんしゃくもち」等が多く記述されていた。保育所や幼稚園における助言・指導は保護者の心配内容と同様に気持ちのコントロールの難しさや注意・集中の難しさ等に関する助言・指導が多くみられた。一方で、健診や発達相談で最も多い割合で助言・指導を受けていた発達全般や言葉に関する内容は、保育所・幼稚園においては助言・指導内容としてあがっていなかった。

3歳～5歳児で最も多かったのは「こだわりが強い」で26.5%であった。次いで、「すぐに手が出る」（21.8%）、「先生の話が聞けない」（20.1%）であった（図25参照）。ここでも、「その他」の自由記述による回答が多くみられ、「言葉の発音が悪い」、「マイペース」、「食べるのが遅い」、「集団生活が苦手」、「爪かみ」、「言葉の理解が難しい」、「言葉が遅い」等の回答が多く見られた。3歳～5歳児では、注意・集中や気持ちのコントロールの難しさに加えて、こだわりや対人関係に関わる難しさで助言・指導を受ける割合が増加していた。また、0歳～2歳児ではほとんどみられなかった言語発達に関わる助言・指導もみられた。これは、健診・発達相談における言語発達の助言・指導の割合が

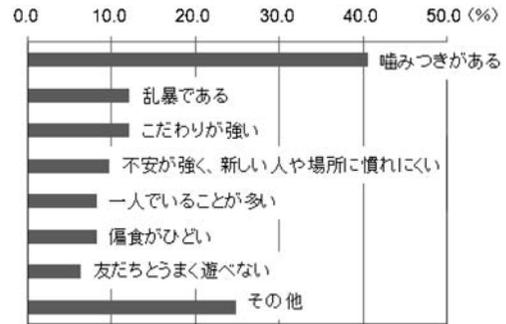


図24 保育所・幼稚園での助言・指導内容（0～2歳児）

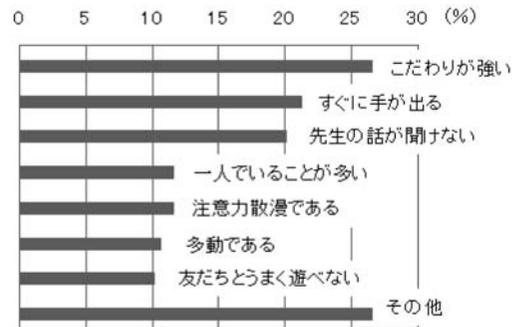


図25 保育所・幼稚園での助言・指導内容（3～5歳児）

1、2歳台で最も多く、その後減少するという結果と相違する結果となった。

##### ② 助言・指導後の支援

保育所・幼稚園で助言・指導を受けた後、どのような支援がなされたか尋ねた質問では、「特に何もなされなかった」という回答が最も多く4割であった。次に多かったのは「以前よりも園とよく話し合いをもつようになった」（23.4%）という回答であった（図26参照）。「その他」の自由記述による回答では「きちんと声かけ等によってしつけてくれた」、「注意して丁寧に見てもらった」、「心配事や分からないことがあれば、その都度先生と話をさせてもらっている」、「様子をみていくことにした」、「大丈夫

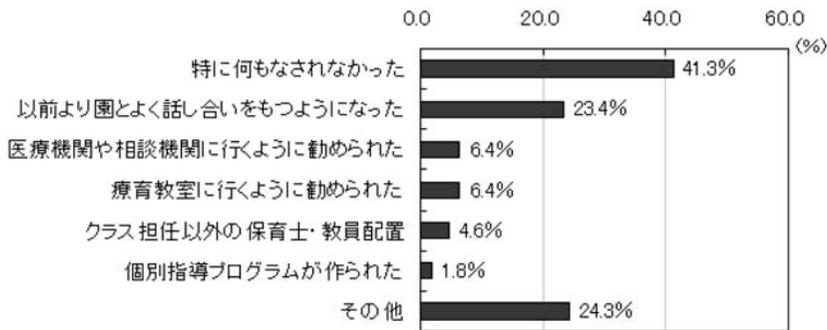


図26 保育所・幼稚園での助言・指導後の支援

と言われた」,「連絡帳で先生とやりとりをした」,「保健師さんやサポートセンターに様子を見にきてもらった」等の回答がみられた。これらから,専門機関による支援よりもまずは園内で支援していくことの方が多いたことが分かる。

### ③助言・指導内容とその後の支援

保育所・幼稚園で助言・指導を受けた後,「特に何もなされなかった」ケース(「支援なし」)と,何かしらの支援を受けたケース(「支援あり」)が,どのような内容の助言・指導を受けたのか調べた結果,0~2歳児において,「噛みつきがある」や「乱暴である」という助言・指導は,「支援がなし」が「支援あり」に比べ高い割合でみられた。一方で,発達障害の気づきの指標となり得る「偏食がひどい」,「友だちとうまく遊べない」という内容で助言・指導を受けたケースは必ず何かしらの支援を受けていることが分かった(図27参照)。

3~5歳児において,「先生の話が聞けない」,「すぐに手が出る」という助言・指導は,「支援なし」が「支援あり」に比べ高い割合でみられた。逆に,0~2歳児同様に,発達障害の気づきの指標となり得る社会性や対人関係の難しさに関わる「一人であることが多い」,「友だ

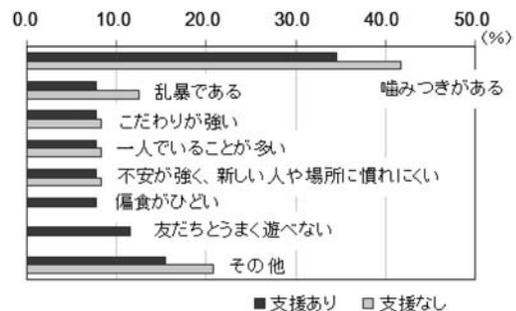


図27 助言・指導内容と支援の有無(0~2歳児)

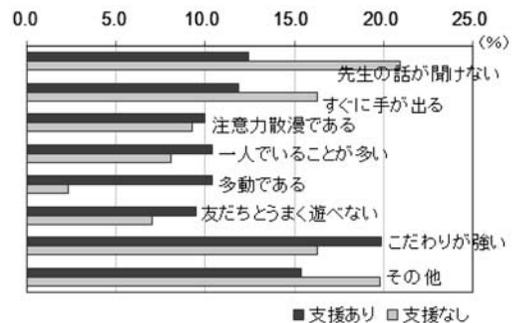


図28 助言・指導内容と支援の有無(3~5歳児)

ちとうまく遊べない」や「多動である」,「こだわりが強い」で助言・指導を受けたケースでは,その後「支援あり」が「支援なし」に比べ高い割合でみられた(図28参照)。

### ④助言・指導内容に関する相談相手

保育所・幼稚園で受けた助言・指導に関して

誰かに相談したか尋ねた質問では、99%の保護者が「相談した」と回答しており、ほとんどの保護者が誰かしらに相談していることが分かった。

相談相手は「配偶者・パートナー」が73.2%と最も多かった。次に「園長・先生」(54.6%)が多く、次の「その他の家族」(52.6%)とほぼ同じ割合であった(図29参照)。

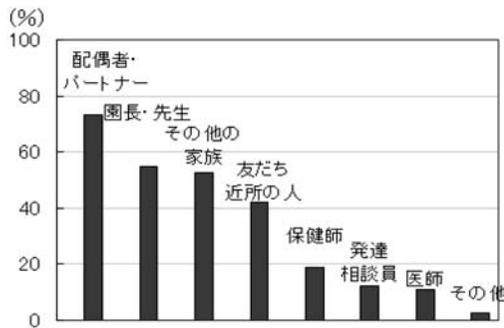


図29 助言・指導内容の相談相手

⑤助言・指導を受けた保護者の子育てニーズ

保育所・幼稚園において助言・指導を受けた保護者と受けていない保護者の間で、子育てにおけるニーズに違いがあるのかを調べた結果、助言・指導を受けた保護者は受けていない保護者に比べて有意に高い割合で子育てにおけるニーズをもっていることが分かった ( $\chi^2(1) = 20.211, p < .01$ )。

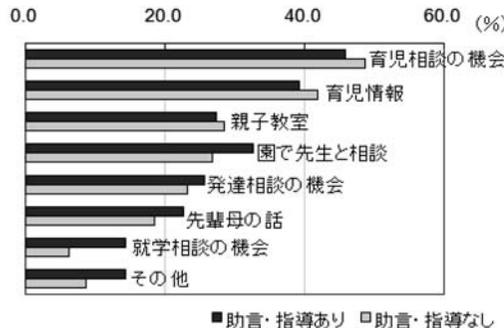


図30 助言・指導の有無と子育てニーズ

ここでも、健診や発達相談において助言・指導を受けた人と同様、保育所・幼稚園において助言・指導を受けた人は、より高い割合で「就学相談の機会」を求めている。さらに、健診や発達相談における助言・指導ではあまり差のみられなかった「園で先生と相談」を高い割合で求めている。これは、助言・指導を受けた場所が保育所や幼稚園であったことが大きく影響していると考えられる(図30参照)。

⑥小考察

全体の15%の子どもが保育所や幼稚園において助言・指導を受けており、これは健診や発達相談での助言・指導を受けた割合と同じ割合であった。保育所や幼稚園における助言・指導内容では0歳～2歳児では、注意・集中や気持ちのコントロールの難しさに関わる内容が多くみられ、3歳～5歳児では、注意・集中や気持ちのコントロールの難しさに加えて、こだわりや対人関係に関わる難しさの内容が多くみられた。気持ちのコントロールの難しさや注意・集中の難しさは保護者の心配内容でも多くあげられていたが、加えて保育所や幼稚園ではこだわりや対人関係に関する内容が多くみられ、集団保育という家庭とは質の異なる場面においてこのような行動上の難しさが問題行動として顕在化しやすいことがうかがえる。また、「かみつき」の問題は、1歳児クラスでは定番の悩みであることが指摘されており(西川, 2003), 保護者への対応を含めて保育者にとって深刻な悩みの種となっている。「かみつき」は自我の誕生・拡大に言葉の発達が追いつかない等の理由によって生じると考えられる問題行動の一つである。そのため、この時期特有の問題行動を発達の視点から正しく受け止め、対応することが

保育者には求められる。

保育所・幼稚園で助言・指導を受けた後、「特に何もなされなかった」と回答した保護者が4割存在していた。これは、実際に何かしらの支援がなされていたとしても、その具体的な支援が保護者には見えにくいことが要因の一つとして考えられる。加えて、保育所や幼稚園では、少し様子を見る等の対応や、その場に応じて臨機応変に対応を取ることはあっても、個人別の支援プログラムを組み立てにくい現状があるのではないだろうか。また、助言・指導を受けた後、保育所・幼稚園内での対応に留まるケースも高い割合でみられ、第三者機関が活用されていない現状が明らかになった。助言・指導を受けた保護者は高い子育てニーズをもっており、特に「就学相談」や「園長・先生との相談」の機会を求めていることから、保育所・幼稚園による子育て支援は今後さらに重要になると考えられる。そのため、保育者のさらなる発達の知識や相談スキルの向上が求められるとともに、問題を保育所・幼稚園内だけで抱えるのではなく、第三者機関と連携を図りつつ子育て支援を進める必要がある。

#### (5) 健診・発達相談と保育所・幼稚園の場における助言・指導の関連性

##### ① 助言・指導の一致率

健診・発達相談における助言・指導と保育所・幼稚園における助言・指導がどの程度一致しているのかを調べた結果、両者からの助言・指導を受けていない保護者は1216人と全体の75%、両者から助言・指導を受けた保護者は74人で全体の4.6%であった。一方で、保育所・幼稚園では助言・指導を受けていないが健診・発達相談で助言・指導を受けた保護者は170人

(10.5%)、逆に保育所・幼稚園で助言・指導を受けたが健診・発達相談で助言・指導を受けていない保護者は163人(10.0%)と同程度存在した。このことから、健診・発達相談と保育所・幼稚園での助言・指導の一致率は18%であることが分かった(図31参照)。



図31 健診・発達相談と保育所・幼稚園における助言・指導の一致率

##### ② 助言・指導内容の関連性

健診・発達相談と保育所・幼稚園において、ともに助言・指導を受けたことがある子どもが、両者からどのような内容の助言・指導を受けているのか、その助言・指導内容に関連性はあるのか調べた。0歳～2歳児では両者から助言・指導を受けている子どもが9名しかいなかったため、ばらつきも大きく、特徴的な結果は得られなかった(表2参照)。3歳～5歳児では、両者から助言・指導を受けている子どもが65名存在した。その内容では、健診や発達相談において「発達がゆっくり」、「ことばが遅い」と助言・指導を受けている子どもは、保育所や幼稚園において様々な助言・指導を受けていた。「発達がゆっくり」、「ことばが遅い」という特徴は、発達の全体的な特徴を大きく捉えた内容であるため、保育所や幼稚園の集団場面で見られる細かい特徴を捉えた助言・指導内容を包括している可能性が考えられる。最も特徴的

表2 健診・発達相談と保育所・幼稚園における助言・指導内容の関連性（0～2歳）

		保育所・幼稚園							
		噛みつき	偏食	乱暴	こだわり	一人である	友達遊べない	不安強い	その他
健診・発達相談	ことばが遅い	2		3	1	1	2	1	1
	自閉傾向がある								
	発達がゆっくり	1						1	
	落ち着きがない				1				2
	友達と遊べない								1

表3 健診・発達相談と保育所・幼稚園における助言・指導内容の関連性（3～5歳）

		保育所・幼稚園							
		一人である	多動	話聞けない	友達遊べない	注意力散漫	こだわり	手が出る	その他
健診・発達相談	ことばが遅い	9(36.0)	7(21.0)	10(38.0)	6(33.0)	6(19.0)	17(40.0)	4(31.0)	8(50.0)
	自閉傾向がある	4(16.0)	4(12.0)	2(8.0)	1(6.0)	3(10.0)	5(12.0)	2(15.0)	0(0.0)
	発達がゆっくり	5(20.0)	6(18.0)	6(23.0)	5(28.0)	7(23.0)	12(28.0)	4(31.0)	5(31.0)
	汚ち着きがない	3(12.0)	11(33.0)	6(23.0)	3(17.0)	10(32.0)	6(14.0)	3(23.0)	3(19.0)
	友達と遊べない	2(8.0)	2(6.0)	1(4.0)	1(6.0)	2(6.0)	1(2.0)	0(0.0)	0(0.0)
	視線が合いにくい	2(8.0)	3(9.0)	1(4.0)	2(11.0)	3(10.0)	2(5.0)	0(0.0)	0(0.0)
	合計	25(100.0)	33(100.0)	26(100.0)	18(100.0)	31(100.0)	43(100.0)	13(100.0)	16(100.0)

であったのは、健診や発達相談において「落ち着きがない」と助言・指導を受けている子どもは、保育所や幼稚園でも高い割合で「多動である」「注意力が散漫である」という内容で助言・指導されており、両者から注意・集中に関わる難しさとして把握されていた（表3参照）。注意・集中に関わる難しさは行動上の問題として把握しやすく、両者において認識が一致しやすいことが分かる。

次に、健診や発達相談では助言・指導を受けていないにも関わらず、保育所や幼稚園で助言・指導を受けている子どもが、どのような内容で助言・指導を受けているのかを調べた。その結果、0～2歳児では「噛みつきがある」が最も多い割合で保育所・幼稚園から助言・指導を受けていた（図32参照）。3～5歳児では「すぐに手がでる」、「こだわりが強い」、「先生の話が聞けない」という内容で助言・指導を受



図32 保育所・幼稚園のみ受けた助言・指導内容（0～2歳）

けている割合が多い傾向にあった。また「その他」の項目も多く、その中では前述した「言語発達」に関わる難しさや生活習慣に関わる問題が多い結果となっていた（図33参照）。これらのことから、集団場面や対人関係における気持ちのコントロールの難しさや生活習慣の問題、そして「こだわり」に関する問題は、保育所や幼稚園において把握されやすいことから保護者

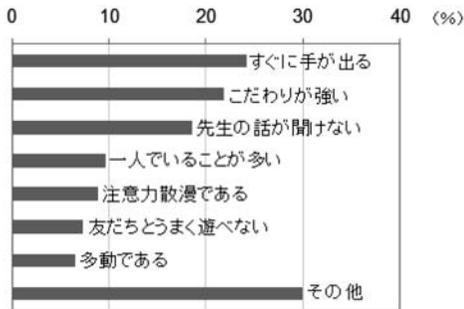


図33 保育所・幼稚園のみ受けた助言・指導内容 (3～5歳)

に伝えやすいが、健診や発達相談では、把握しにくいために見落とされる可能性があることが分かった。

### ③その後の支援状況の関連性

健診・発達相談と保育所・幼稚園における助言・指導後の支援の有無に関連性があるのか調べた。その結果、健診・発達相談と保育所・幼稚園で、ともに助言・指導を受けた後、どちらからも支援がなされている子どもは41%、保育所・幼稚園で何らかの支援を受けているが、その他の専門機関には通っていないが子どもが18%、専門機関に通っているが保育所・幼稚園では支援を受けていない子どもが8%、そして、どちらからも支援を受けていない子どもは13%であった(図34参照)。

次に、保育所・幼稚園でのみ助言・指導を受けた子ども163人の内、保育所・幼稚園において支援を受けていない子どもは42% (図35参照)、健診・発達相談のみ助言・指導を受けた子ども170人の内、どこの機関にも現在通っていない子どもが54%存在していた(図36参照)。保育所・幼稚園もしくは健診・発達相談のどちらからか助言・指導を受けているにも関わらず、現在、何かしらの支援も受けていない子ど

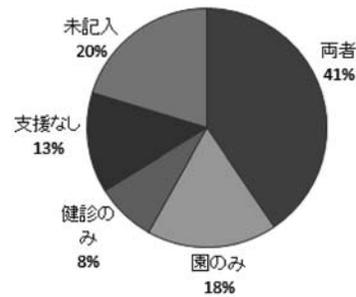


図34 両者から助言・指導を受けた後に支援のあった機関 (74人中)

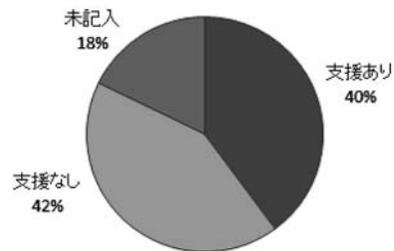


図35 保育所・幼稚園で助言・指導を受けた後の支援の有無 (163人中)

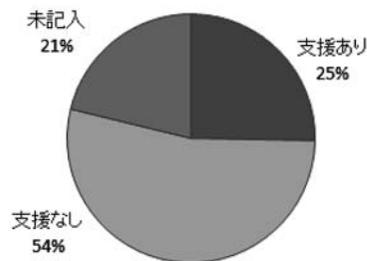


図36 健診・発達相談で助言・指導を受けた後の支援の有無 (170人中)

もが過半数程度存在していることが分かる。特に、保育所・幼稚園での助言・指導に比べて、健診・発達相談というより専門的な機関での助言・指導において、その後の支援を受けている子どもの割合が低くなるという結果になった。

以上のことから、健診・発達相談と保育所・幼稚園の場の両者で助言・指導を受けていることが、その後の支援にもつながりやすいことが分かった。保育所・幼稚園での助言・指導内容

は行動上の問題から基本的生活習慣に関するものまで様々であり、保育所・幼稚園での助言・指導内容と健診・発達相談での助言・指導内容では深刻さや次元が異なってくる。そのため、保育所・幼稚園での助言・指導に関しては、保育所・幼稚園という場において幅広い支援がなされやすいことが示唆される。

### おわりに

本調査から、子どもの心配な行動として3者間で共通してみられた内容は「落ち着きのなさ」「多動」「注意力散漫」等の注意・集中の問題に関わるものであった。これらの行動は、家庭・保育・相談場面に関わらず、行動上の問題として把握されやすく、3者間において認識が一致しやすいことが示唆される。

保護者の心配内容は子どもの発達の変化に関わるものも多く、発達の専門的知識をもつ者が相談にのることにより、ある程度軽減されるものもあった。一方で、保護者特有の心配内容として「おねしょ」や「偏食」といった生活習慣に関わるものや「不安が強い」といった情緒的側面に関わる内容も多くみられた。軽度発達障害の徴候が保護者側には問題として気づいているにも関わらず、現在の乳幼児健診では見逃されやすいことが指摘されていることから（杉山, 1999）、発達の側面だけではなく、保護者が気にしている生活習慣や情緒的側面の問題にも注意を向ける必要がある。

保育所・幼稚園による助言・指導では、「落ち着きのなさ」「多動」「注意力散漫」に加えて、「こだわり」や「かみつき・すぐに手がでる」といった家庭や健診場面ではみられにくい集団生活・対人場面において顕在化される問題が多く

示されていた。鑑ら（2005）は、保育士を対象とした事例検討会の中で「気になる子」として取り上げられた子どもの特徴が「粗暴」、「集団不適応」、「多動」であった事に関して、集団保育を行うにあたり、そのような子どもたちが「気になる」のはごく自然なことであり、それをきっかけとして、その行動の背景にあるものを洞察し、子どもや家族への支援が開始されることが望ましいと述べている。一方で、これらの問題行動の背景にあるものを正しく把握するための発達の視点や社会福祉の視点が保育士に求められる。鑑ら（2005）の調査の中でも、検討会においてソーシャルワーカーから社会福祉援助技術の理論や視点が、保育士に新たな観点や理論として提供されたことにより、保育士が子どもや家族の関わりを深く洞察するようになり、結果的に子どもの問題行動の改善につながっている。岩藤らの調査（2007）でも、園外の専門家がコンサルテーターとして加わることによって、保育者に自信と安心を与え、さらに援助者としての技術を向上させることにつながり、保護者の自尊感情を高める結果となった。このように、園外の専門家が加わり、保育士・教諭が新たに発達の・社会福祉の視点、援助技術を提供されることにより、子どもへの保育に加えて、保護者への子育て支援としての機能を果たしていくことが期待される。荒牧らの調査（2004）でも、幼稚園が実施している子育て支援を使用している保護者は、利用する必要を感じていない保護者に比べて育児不安が高かったことから、幼稚園が身近な支援の場として機能することの重要性を指摘している。

助言・指導後の支援状況では、健診・発達相談と保育所・幼稚園の両者から助言・指導を受けていることが、その後の支援につながりやす

いのにに対して、健診・発達相談のみの助言・指導では、その後の支援につながりにくいという実態があることが明らかになった。助言・指導内容では大きく発達全般や言語発達に関わる内容が大半を占めており、発達障害の気づきにもつながり得る「自閉傾向がある」「視線が合いにくい」「やり取りが苦手・友だちと遊べない」という助言・指導は極めて少ない。一方で発達障害の気づきにもつながり得る内容で助言・指導を受けた場合は100%、その後の支援につながっているという結果がでている。このことから、明らかに心配な行動を示す場合は支援の対象として健診・発達相談においても把握されやすくその後の支援へとつなげやすいが、心配ではあるが障害として判断しかねる場合には、より包括的な側面として発達全般や言語発達に関わる問題として助言・指導され、その後、支援の対象から見落とされているケースがある可能性も考えられる。そのため、健診・発達相談で判断しかねるような心配な行動を評価できる明確な基準として発達障害児の早期発見に関わる新たなスクリーニングツールを導入することは一定の有用性があると考えられる。また、前述した保護者特有の心配内容も発達障害の徴候であることも考えられるため、親の育児困難感等も聞き取ることでできるような問診・健診内容の検討が求められる。

保育所・幼稚園と健診・発達相談との連携において、丸山（2006）は、保育者が発達診断・発達相談に期待するものとして、保育者が子どもの心配な状態の理解に迷った場合に他の専門職からの情報を得たい、判断を聞きたい場合に加えて、障害のある子どもや発達につまずきのある子どもについて保育計画を考える場合等をあげている。筆者らの調査においても保育所・

幼稚園の場において助言・指導を受けた子どもで個別の支援プログラムが考えられたケースや、園外の専門機関を活用するケースは極めて少なく、専門家なしに園内で個別支援プログラムを考えることが難しい現状にあることがうかがえる。また、中井ら（2006）によると、明らかに心理職の援助が必要であるような事例であっても園内でのみ懸命に改善策を探っている等、従来から存在している機関や領域において、他の職種や機関との協働が必要であるという観点を持つこと自体が難しい現実もある。しかし、健診・発達相談の果たす機能は、養育や保育、療育を実践する場と連携することで発揮されるものであり、前述したように保育所・幼稚園における子育て支援の機能が生かされるためにも同様のことが言える。また、筆者らの調査結果から保護者の子育てニーズは、抱えている心配内容や受けた助言・指導内容によって「発達相談の機会」や「就学相談の機会」といった専門家による支援を求めるものから、「園で先生と相談」といった保育所・幼稚園の場といった身近な場所に支援を求めるものまで多岐に渡っている。加えて、子どもが生活する場面や子どもの発達状態を確認する場面特有の把握されやすい行動があり、この事実は各機関独自で子育て支援を行うことの限界性を示すものであると同時に、連携・協働し、保護者や子どもの抱えている問題を共有することによって各機関の専門性を生かした多面的な子育て支援を提供することが可能である。そのため、保護者と保育所・幼稚園、その他の専門機関との協働・連携は必須であり、そのような支援システムを構築するための条件整備が期待される。

## 謝辞

本調査実施にあたって舞鶴市児童・障害福祉課の瀬野淳郎課長、瀬野勝久課員はじめ市役所、保健所、各園のみなさんには、内容の検討、配布・回収、結果分析等についてご意見をいただいたり、ご協力をいただいたりした。ここに記して感謝します。

## 注

- 1) 本調査は京都府舞鶴市の依頼のもと実施された。本調査結果は2008年2月9日発達障害支援シンポジウム（於：舞鶴市）において発表されている。本稿は、舞鶴市の許可を得た上で筆者らの責任において論文としてまとめなおしたものである。
- 2) 舞鶴市は京都府北部に位置しており、市の東西南側の三方を山に囲まれ、北側は若狭湾に面している。日本海側の主要港町として歴史が古く、自衛隊海軍の旧施設、戦後の引き揚げ指定港など、日本の歴史の中でも重要な位置付けを担ってきた。面積は342.15平方km、人口90,001人、世帯数34,932人と京都府北部最大の都市である（舞鶴市勢要覧より抜粋）。
- 3) 厚生労働省による障害者自立支援調査研究プロジェクトの対象事業であり、京都府中丹東保健所、舞鶴市私立幼稚園協会、舞鶴市民間保育園連盟、立命館大学人間科学研究所が共同して行っている。本調査は本事業の一環として取り組まれている。その他の取り組みについては舞鶴市児童・障害福祉課発行の『幼保小の発達支援ニュース』1号-4号を参照されたい。
- 4) 本稿は2008年2月9日発達障害支援シンポジウムで発表した内容（荒井庸子・前田明日香「発達障害児の実態とニーズ—舞鶴市の保育所・幼稚園の調査から—」）のうち前田の報告をまとめなおしたものである。
- 5) 質問紙を作成するにあたり、京都府中丹西保

健所中丹広域振興局健康福祉部による『平成16年度保健福祉環境等調査研究事業報告書』を参考にした。

## 引用文献

- 荒牧美佐子、安藤智子、岩藤裕美、金丸智美、丹羽さかの、立石陽子、砂上史子、掘越紀香、無藤隆（2004）「幼稚園における子育て支援の利用状況—育兒不安との関連から—」お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要，2，17-26。
- 岩藤裕美、立石陽子、安藤智子、荒牧美佐子、丹羽さかの、砂上史子、掘越紀香、無藤隆（2007）「幼稚園における子育て支援—幼稚園における「子育て相談」の形態と保護者の精神的健康との関連から—」お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要，4，27-34。
- 柏女霊峰（2003）『子育て支援と保育者の役割』フレール館。
- 鑑さやか、千葉千恵美（2005）「社会福祉実践における保育士の役割と課題—子育て支援に関する相談援助内容の多様化から—」保健福祉学研究，4，27-38。
- 丸山美和子（2006）「保育所保育における「発達診断・相談」の今日的意義と課題—発達相談員に求められる専門性を中心に—」社会福祉学部論集，2，79-93。
- 中井歩、小土井直美、徳永正直、瀬々倉玉奈（2006）「子育て支援の諸相(4)子育て支援・子育て支援に関わる専門領域の協働をめぐる論考」大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要，5，187-201。
- 西川由紀子（2003）『子どもの思いにこころをよせて—0，1，2歳児の発達—』かもがわ出版。
- 杉山登志郎、辻井正次（1999）『高機能広汎性発達障害—アスペルガー症候群と高機能自閉症—』ブレーン社。

## A study on the actual condition and needs of child care in Maizuru city

MAEDA Asuka \*

ARAI Yoko \*

ZHANG Rui \*

INOUE Yohei \*

ARAKI Hozumi \*\*

TAKEUCHI Yoshiaki \*\*

**Abstract:** This paper studies the actual condition and needs of child care of the parents in Maizuru city. Furthermore, we consider what support parents desire through investigation which kind of side of the child development a nursery teacher and developmental consultant pay attention to. The Following results were found: (1) It was clarified that worried content about child development was different between parent, a nursery teacher and developmental consultant. (2) In the support for the children who have problem behavior, there are the most cases which were not supported or stopped at corresponding in each organization occupied. (3) Needs of child care of the parents, it was crossing variably according to the contents of advice given from each organization or anxious contents of parents. It is expected offering the many-sided child care support which employed each specialty efficiently by sharing the problem which the parents and the child have between each organization.

**Keywords:** Needs of child care, Child care support, Feeling of child care, Parents, Infant medical checkup, Preschool

---

\* Ph.D Candidate, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University

\*\* Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University